

おわりに

本書は一般医療者向けに書かれたものです。現代医療において漢方薬が存在することに意味を感じ、広く理解をしていただくことが肝要であると考え執筆することになりました。このため、本文では薬価基準に記載されたエキス剤のなかから、日常診療で頻用されると推察されるものを取り上げました。しかし、診療の内容により必要となる処方には違いが生じるので、紹介しきれなかった処方付録とし、簡潔な解説を加えました。また、漢方薬は生薬を重ねてつくられる薬剤ですので、配合の仕方によって数多くのアレンジが存在することになります。これらに関しても、配合される生薬の働きから適応をお考えいただければよいと考えています。

漢方薬の元となる生薬の使用は古代から連綿と続いたものです。当然のことながら現代医療の目線で育まれたものではありません。しかし、そのことがかえって現代のわれわれが見失いがちなことを教えてくれる、そのような局面が多々あります。また、東洋医学を知ることは何も漢方薬の使い方に長ずることだけがメリットなのではありません。漢方薬と東洋医学との関係は時計と時間のようなものです。時計は時間を表すものであっても時間にはなりえないし、時計をもっているだけで時間を有効に使うことができるわけでもありません。漢方薬は治療に必要なものではありませんが、漢方薬を使えばそれだけでよいということではないはずで、東洋医学はわれわれに人の診かたそのものを教えようとしてくれます。そのことが大事なのであって、漢方薬の効能だけに目を向けるのではなく、現代医療のなかでなぜ東洋医学が意味をもつのかを考えるべきであると思います。

わが国では、漢方薬に健康保険が適用されています。これは国民にとってとても幸福なことであると言えましょう。しかし、その幸福を享受するためには何よりも漢方薬の真の姿を理解することが前提となります。漢方薬や漢方薬を用いた治療は決して特殊なものではありません。順を追って理解すれば、どなたにでも実践することができるものであるはずで、

本書が皆様にとって漢方薬を知る一助となり、知識のみならず思考するきっかけとなり得れば幸いです。

本書を出版するにあたっては、峰尾信章氏に多大なご協力をいただきました。また、わたくしの主旨をご理解いただき、羊土社スタッフの皆様は粘り強く編集作業をしてくださいました。最後になりますが、ここに謝意を表します。

2026年3月

浅岡俊之